

アンサンブル室町 —21世紀の新しい教育—

ローラン・テシュネ*

1. はじめに

「織田信長は、そのメロディーにうっとりとき入っていた。それは、大名家の血筋であり、当時、近江の国に在住していたジェローム伊東が、ヨーロッパからもたらされたチェンバロで奏でたものであった。豊臣秀吉家は、チェンバロを2台、所有していた」

この文章は1970年にパリで出版されたピエール・ランディ著『日本の音楽』からの抜粋です。実際、室町時代には、ヨーロッパのバロック楽器が、いくつか日本にもたらされたのですが、そうした楽器は、本来、日本においてキリスト教の布教が最も盛んにおこなわれたこの時期、スペイン人のイエズス会士たちによってラテン語で挙げられるミサの伴奏を行うためのものだったのです。ところで、こうした記述は、単なる歴史的事実を示してくれただけでなく、フランス人チェンバロ奏者として、また作曲家として今こうして日本に生きる私に大きな衝撃を与えたのでした。それは、真に文明的、文化的、芸術的な衝撃だったのです。

2. チェンバロ+日本

このことがきっかけとなって、私はチェンバロ奏者として「世界初の試み」、すなわちチェンバロと伝統的和楽器の対話、合奏を企てたのです。チェンバロと伝統的和楽器の融合など、当時としては、冒険的試みとも言えるものでした。実際、こうした演奏をする楽団のために独自に書かれた作

品は、当時存在していませんでしたし、私自身、もともとあった作品をアレンジしてみようとは思わなかったので、同僚や友人の作曲家の何人かに楽団用の新しい演奏曲を創ってくれるようお願い出たのです。

現代の創作活動にもつながる、こうした古楽器の融合は、私を魅了し、私にとって、過去/現在/未来という、三つのものに同時に送られる賛辞となったのです。すなわち1)過去から受け継がれた遺産と、2)現在からもらい受けるエネルギー、3)信頼に満ちた未来への展望、という三つのものへの賛辞なのです。

異なる文化から生まれた古楽器同士の融合は、その上、あるひとつの世界の理想に結びついています。その世界とは、さまざまな文化に由来する驚くべき多様性を自覚し、尊重しながらも、あらゆる文化を融合した上で、一体となって、偏りのない、調和のとれた、寄り美しい社会を丹念に作り上げていくことを可能にする世界なのです。

こうして、東京にある音楽の友ホールで、コンサートが催されました。宮田まゆみ氏(笙)、藤原道山氏(尺八など)といった演奏者によるコンサートで、6人の作曲家との親善コラボレーションでした。その後、私はCDを制作し、これらの作品を世に広め、他の演奏家がこれを演奏してみようとか、別の企てを試しにやってみようという気になるよう仕向けてみたのです。また、同様に、コレクション『チェンバロ+』という楽譜集を自ら企画運営し、マザー・アース社より出版しました。

* 東京芸術大学

3. アンサンブル室町

2007年、北とびあ国際音楽祭に参加してはどうかというお話を頂きました。私が、「チェンバロ+日本I」（この時は、チェンバロ以外の楽器も、いくつか加えられていましたが）という私個人の芸術的試みに、集団としての広がりをもたせることで、その表現芸術としての幅を広げ、これを普及させていきたいと考えたのは、正にこの時だったのです。

私は、それで、教え子たちと協力して「アンサンブル室町」を結成し、同年、豊臣秀吉にささげる『豊臣秀吉の夢』と題する作品の公演で、「アンサンブル室町」を旗揚げしたのです。

・『豊臣秀吉の夢』

この初めての公演がきっかけとなり、私は、複数の芸術表現形式によるコラボレーションを思いつきました。8人の作曲家の手による8つの小品の演奏、エリック・サティ作『スポーツと気晴らし』から抜粋した詩曲の演劇場面での演奏、日本舞踊、豊臣秀吉の最後の書簡を読み聞かせる能楽師の謡など、この作品の公演は、こうしたいくつもの芸術のコラボレーションから成り立っていたのです。「アンサンブル室町」の真髓がここに誕生したのです。

・『邯鄲』

これは、2008年に上演しました第2回公演です。日本古来の伝統芸能である能楽の作品群の中でも非常に良く知られた演目である『邯鄲』と、三島由紀夫の戯曲集『近代能楽集』に収められた『邯鄲』（同じ主題を20世紀という時代に移行させたもの）を題材としました。

・2009年に、私たちは一連のワークショップ・コンサートの活動を始めます。この企画では、実質的教育要素を組み入れ、聴衆のより直接的、より能動的な参加を促しました。

・『百扇帖』『百扇帖II』

2010年と翌年に2年連続で上演しましたこの公演は、ポール・クローデルの『百扇帖』から着想を得て作られました。この作品は、日仏両国の芸術的共同作業から生まれ、挿絵つきの極めて美しい文学作品とされています。アンサンブル室町は、この連続作のおかげで、外国人の作曲家に門戸を開くことができました。私はここで、ポール・クローデル友の会と中条先生に賛辞を呈したいと思います。彼らは、日本に在在した偉大なこのフランス人作家の作品を広めるといふ偉業をなし遂げたのです。また、このように、フランス文化が日本でこれほどまでに保護されてきたことは、非常に幸いなことであると同時に、光栄なことであることを加えて述べさせていただきます。さらに、音楽部門において傑出した働きを見せているフォーレ協会の存在も忘れてはならないと思います。

・『元素』

2011年7月、私たちは、サントリーホール・ブルーローズの「やってみなはれプロジェクト」の一環として、第5回公演を立ち上げました。公演のテーマは、万有のテーマ、「元素」です。権代敦彦氏は、このテーマをもとに、彼独自の音楽作品を創作したのですが、そこにはバロック音楽の作曲家であるジャン＝フェリ・ルベルの作品『4大元素』からの抜粋が組み込まれています。日仏双方の文化的違いに向き合うことで、自然元素に関する概念の相違を考えようとするものです。舞踏の振付けは、伊藤キム氏に一任し、声明は齋藤説成によって朗唱されました。

・『塔にみる夢、未来に捧げる祈り』

2012年、東京江戸博物館の依頼により、東京スカイツリー完成記念特別展「ザ・タワー～都市と塔のものがたり」関連公演として第6回公演を催しました。第一部ではジャン・コクトーの『エッフェル塔の花嫁花婿』をアレンジした演劇と音楽のコラボレーション『塔』を上演し、第二部では2011年に上演しました『元素』を再演しました。

・2012年、アンサンブル室町は、一連の「レクチ

「オーケストラコンサート」活動を開始します。この活動の目的は、楽器そのものや、楽器の歴史的成り立ち、製造技法などについての関心を、聴衆に持ってもらうことにあります。このシリーズは、デュオからカルテットまでの小編成の演奏を軸にしています。というのも、演奏規模を小編成にすることによって、それぞれの演奏者が、古今に渡るレパートリーの中から例として選んだ曲を実際に奏でながら、自分自身の楽器について語るができるからなのです。演奏者総出の演奏も行われ、作曲家による解説が行われます。

・『源氏物語』

2012年の年末に制作された公演で、4人の作曲家が、あの名高い『源氏物語』からインスピレーションを得て創作した曲によって構成されています。この公演では、歌とのコラボレーションを初めて試みました。ちょっとした備考点として付け足すべき事柄は、この作品を体験した多くの学生が、『源氏物語』という優れた文学作品をもう一度読みたい（あるいは、読んでみたい）と思うようになるという事実です。複数の芸術表現の融合は、このように、常に、建設的な方向へと私たちを導き、その視野を広げてくれるものであると言えるでしょう。

・『帝国の建設者』

2013年6月には、ボリス・ヴィアン原作、岩切正一郎氏翻訳の戯曲『帝国の建設者』を石丸さち子氏の演出、久木山直氏作曲の音楽を生演奏する形で上演いたしました。「アンサンブル室町」所属の13人の音楽家たちが、指揮者なしで楽器を演奏し

ました。彼らひとりひとりが、それぞれに、演劇との対話に全力を注いだのです。

・『東方綺譚』

私たちは、世界的に有名なアーティストを招き、ソリストとしてアンサンブル室町の舞台に立っていただくという「スーパーゲスト」シリーズを始めます。シリーズ第1弾は、来る10月26日、フランス系韓国人ヴァイオリニスト、ヘエ＝スン・カング氏を特別にお招きし、津田ホールで催されます。この公演では、マルグリット・ユルスナール作『東方綺譚』からインスピレーションを受けた日仏の作曲家による4つの曲が披露される予定です。

4. おわりに

「アンサンブル室町」は人間の創造性を促進し、称揚しています。私たちはありとあらゆる形式の芸術表現を共有したいと思っています。そして、熱意のある人々のエネルギーを受け入れ、彼らとの協力を進めています。「アンサンブル室町」は芸術や文化がいつそう必要とされている社会において、その社会のために活動しています。この21世紀という時代の激しい変化に加わりながら、その変化を促そうとしているのです。

(翻訳：柴田恵美)